

## 実況中継

東京都日野市・日野わかさ幼稚園「親子のつどい」

## 子を育てて知る親の恩

年に1度のファミリー山歩き



百草園駅のホームから見える日野わかさ幼稚園。園舎は素朴なクラシックタイプだが背後の山が同園の雄大な自然環境である。



まずは園長先生から幼児教育の大切さと親子の絆について仏教の香り漂うお話を聞く。

## 毎日二度、稚児大師にご挨拶

京王線・百草園駅で電車を降り、ホームから緑の山を見やると、ふもとに日野わかさ幼稚園(清水博雅園長)が見える。クラシックタイプの園舎だが、雄大な自然をバックに堂々と建っている。この裏山の自然が、同園の子ども達のでっかい遊び場なのである。

2008年6月1日、よく晴れた日曜日、日野わかさ幼稚園では「親子のつどい」が行われた。ふだんは園児と先生が足腰を鍛えている山に、お父さん、お母さんも挑戦する日である。もちろん他の日でも、一言先生に声をかければ、幼稚園に来たついでに山歩きするのは可能だが、険しい山道を前にそこまで頑張る親はめったにいない。その代わりに年に1度のこの日は、ほぼ全員の父母が意を決して山をめざすのである。

と言っても、毎年必ず登れるわけではない。雨の日はもちろん、雨が降った後で地面が滑りやすいときは情け容赦なく中止になる。幼稚園の裏山といえど決して高をくくってはいけな山なのである。だから子ども達も毎日山歩きができるわけではない。そして山に入るときはしっかりと緊張感を持っている。

今回も前日の午後まで雨が降っていたので、「ダメかも知れない」と思って来たのだが、朝一番にみずから状況を確認めて歩いた清水園長が「大丈夫、今日は歩ける。君は運がいいよ」と記者に向かってOKマークを示してくれた。それでも心配な所が二カ所あるそうで、そこには職員が常駐して声をかけるなど入念な打ち合わせが朝の職員会で行われた。





クラスに戻ったお父さんは親子ゲームを教わる。



年長さんのお父さんへのプレゼントは手作りの文庫本カバーとしおりだった。



山歩きのコースを説明する先生。一番大事なことは「危ないところは子ども達がよく知っています。子どもの言うことをしっかり聞いてください」だった。

8時30分、肩を回したり、鉢巻きを締めたり、妙に気合いの入ったお父さんを中心に年少と年長のファミリーが続々とやってきた。一度に全園児の家族が集まると園内は窮屈になるし、山道も渋滞する心配があるので、「親子のつどい」は8時45分から年長・年少グループ、10時45分から年中グループと2回に分けて行うのである。

いつもは園児が付けている名札を、今日はお父さんが付けている。父の日を意識したイベントということもあるが、お母さんの顔は先生方に知れわたっているが、お父さんはまだまだという事情もあるようだ。書いてある名前は子どものものだが、男というものは胸に何かを付けると気合いが入るものらしい。

園庭に入った園児は、いつものように稚児大師の像（年長の頃の空海）に進み、「稚児大師さま、今日も一日よろしくお願いします」と手を合わせた。お父さんとお母さんも見習って合掌する。同園は隣接する真言宗智山派・真照寺を母体する幼稚園なのである。子ども達は帰るときも「稚児大師さま、今日も一日ありがとうございました」と挨拶をする。この毎日の積み重ねが、子どもの身体に染みこんでいくのを親はよく知っている。



園児は自分の部屋へ、父母と兄弟はホールに入って清水園長(写真)と朝の挨拶を交わした。園長先生の声が大きいのはみんな知っているので、負けずに父母も大きな声を張り上げる。ホール全体がビリリと揺れた気がした。

### 幼稚園は最初の学校

まずは園長講話かと思ったら、司会の先生が「はじめにひと言」とマイクを握り直した。「10月の運動会ではお父さん方のご協力がどうしても必要です。運営のお手伝いと競技の出場です。お忙しいとは思いますが、どうか





山に入る前にしっかりと準備体操。



山歩き開始。いきなり急な上りが続く。



ブラブラ橋と呼ばれる吊り橋。年少さんはこわごわ渡るが、年長さんはスイスイ渡る。

お父さん、運動会にも来てください。お願いします」と深々と頭を下げた。

マイクを受け取った清水園長も重ねて「ということですお父さん。先生方の切なる願いを聞き届けてやってください」と言った。ここまで言われると、お父さん方は何が何でも来なくてはいけない気持ちになる。きっと運動会でも顔を揃えたことだろう。

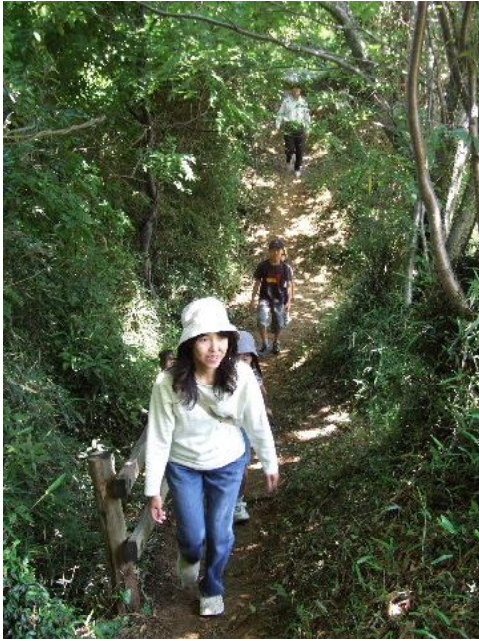
「さて、幼稚園は昔から法律で定められた学校なんですけど、多くの人は学校というと小学校からと思っています」と清水園長は話を始めた。「そこで2007年6月に学校教育法が改正され、学校教育のスタートが幼稚園であることを明確にしました。読み書きソロバンを含め、幼稚園で子ども達はたくさんのことを学んでいる。人間として、あるいは人生にとって一番大切なことは幼稚園で学ぶのです」と話を続ける。2008年3月まで東京都私立幼稚園連合会の会長を16年、全日本私立幼稚園連合会の副会長を8年務めてきた方だけに、法制度と現場の話を結びつけるのが上手だ。

「ところで、親になり、こうして我が子の幼稚園に来たりすると、あなた達が子どもだった頃の親の気持ちを考えることがあるのではないのでしょうか。子を持ち、育てることで、自分を育ててくれた親の恩を知る、それが大事なのです。そのためにも時々幼稚園に来ることは、自分の子ども時代を思い出すうえで意味があるのです」と最後はお寺の住職らしい話で締めくくった。約6分、話好きな清水先生としては短めだった。始まる前、司会の先生が「園長先生、できればお話は5分くらいで……」と言った願いにちゃんと応えたのである。

### ヘビやタヌキに出会えるか

9時、ホールを出た父母は我が子のクラスに戻り、そこでしばらくゲームをしてからお父さんにプレゼントが渡された。年長さんのプレゼントは文庫本の手作りブックカバーで、「いつもありがとう」と書いたしおりも付いていた。「電車の中で使うのはちょっと抵抗あるな」と思いつつも、お父さんはしば





山あり谷あり。



わかくさ山の頂で記念撮影。  
「はいチーズ」「食べたいな」。



山道はまだまだ続く。

し眺めてから「ありがとう、明日から使うよ」と言って大事にしまった。

9時15分、これから登る山道について、先生が地図を示しながら説明を始めた。裏山は三つの山から成っている。最初に一番高いわかくさ山を登り、尾根伝いに竹の子山を越え、鉄塔山の峠から新宿の高層ビル郡を眺め、そこから一気に下ってお寺に戻ってくるというコースである。

清水園長から報告のあった滑りやすい箇所も説明したが、「ほかにも危ない箇所はいくつもあります。子ども達がよく知っていますから、その注意によく従ってください」と付け加えた。

9時30分、親子が園庭に並び体操を始めた。さらに足首を中心に入念に身体をほぐす。荷物に気を取られてはいけないと、荷物はすべて幼稚園に預けて全員手ぶらである。まだ遭難した人はいないそうだが、幼稚園の裏山と侮ってはいけない思いが十分に伝わった。そして「エイ、エイ、オー」の声を上げて年長親子から山に分け入った。

いきなり急な坂道を登り、吊り橋を渡る。そこからずっと登りが続くが、連なって歩くのは危険なのでファミリーごとに間隔を空けて登る。するとそこには自然渋滞が生まれ立ち止まる待ち時間ができる。その時間を無駄にしないようにと、ふもとの園舎から、子ども達の日常を伝える金谷智桂子主任のアナウンスが流れてくる。ゆったりほのぼのとした口調が何とも心地よく、そよ風とともに耳を楽しませてくれた。

「子ども達と歩いているとヘビやタヌキに出会うことがあります。今日はどうでしょうか」との言葉には、山の中から一斉に「エエッー！」という声が上がった。

それにしても急な山道だ。上りは何とかなっても下りが大変だろうと心配される。この山を、わかくさ幼稚園の子ども達は毎日のように上り下りしているのだから足腰が強くなるわけである。「腕の力、背筋力も強くなる。特に身体のバランスをとる能力が磨かれる。





やっとお寺に戻ってきた。「下りがきつかったな」と言いながら顔は晴れ晴れ。



稚児大師とともに子ども達の安全を守る六地藏。



山のおかげで先生たちも足腰が丈夫だ。

わざわざ体育の時間をとる必要はないんだよ」という清水園長の言葉を納得した。

わかさ山の山頂に到着すると、カメラを持った先生が待ち構えていて、10人ほどたまったところで登頂記念撮影をする。カメラの先生が「はいチーズ」と言うと、全員で「食べたいな」と答えてパチリ。これが同園の写真撮影合い言葉のようだ。

10時30分、一番の難所の下り坂を終え、お寺の脇を歩いて園庭に帰ってきた。みんな晴れ晴れとホッとした表情をしている。園庭はすでに次の年中親子のグループも集まり始め賑わっている。嬉しそうに手をつないで帰っていく父子に、「うちは年中の子もいるんで、もう1回山登りしなくちゃいけない」と言うお父さんが、苦笑いしながら手を振っていた。

(記・片岡進編集長)